

「日」曜日になると、群馬県大泉町にある日伯学園と隣接するネスボ・フットサル場は子どもたちのにぎやかな声で溢れる。少年たちがコートで励んでいるのはフットサルの練習。いつばう学園の教室では机と椅子を片付けて広い空間を作り、幼い子どもたちがブラジルの国技・カポエイラの練習に取り組んでいる。

「フットサルコートを作り、体育の授業をはじめ自由にスポーツができるようになったのは2007年からです。スポーツで体を動かすことは心身の健康につながりますが、それだけではなく積極性が生まれ、仲間を作って交流が広がったり、そんな効果も実感してきました」。そう語るのは、日伯学園を運営する大泉日伯センター理事長の高野祥子さんだ。

ブラジル人の子どものための心身を育む場所

大泉町は人口の約1割をブラジル人が占める、日本でいちばんブラジル人の比率が高い町だ。1990年の入国管理法の改正で多数の日系ブラジル人が家族とともに日本にやってきて、その多くが自動車や家電関連の工場のある大泉町に住んでいる。

「91年にブラジル人に向けた日本語塾として大泉日伯センターを立ち上げましたが、そのうちに子どもたちは日本語のほう得意になるけれども、親世代は日本語がわからず、親子の間でコミュニケーションが取りにくくなっているという現

実がありました。そこで、ポルトガル語の授業も行うようになり、2003年にはブラジル人学校の認可を受けました」

ただ、体育の授業は町の施設を借りていたため、自由に使えないこともあった。また、両親が共働きの家庭も多く、放課後の居場所に苦労する子どもたちもいたため、「体育の授業に使える、放課後は子どもたちがスポーツのできる場所が必要だ」という思いから作られたのがネスボ・フットサル場だった。授業はもちろんのこと、放課後には日伯学園の子どもたち以外の地域の人もフットサルを楽しんでいる。また、年に1回行われる地元の警察署のフットサル大会の会場にもなり、学園の子どもチームとブラジル人の大人のチームが招待され、地元との交流にも一役買っている。

カポエイラで祖国の文化を学ぶ

そんな日伯学園でこの4月から始まったのがカポエイラ教室だ。

カポエイラは2014年にユネスコの無形文化遺産にも登録されたブラジルの国技で、ブラジルの奴隷たちから生まれた文化だ。歌、踊り、音楽、武術、さらには礼儀作法の要素も含んでいて、ブラジルの歴史や文化が凝縮したスポーツといえる。実際、ブラジルでは学校の必須科目になっていて、リオ五輪の開会式で演舞が行われたことは記憶に新しい。

「日本にいるブラジル人の子どもたちは、言葉同様なかなか祖国ブラジルの文化に



ペリンバウ(弦楽器)、アタバケ(太鼓)、ヘコ・ヘコ(打楽器)など独特の楽器を演奏する人たちに囲まれて行われるカポエイラ



世界とつながる教室

スポーツを通して母国ブラジルの文化を学ぶ

東武大泉線の西小泉駅を降りると、見慣れない単語を看板に掲げた店が目につく。八百屋の店先の値札もだ。実はどれもポルトガル語。日本でいちばんブラジル人率が高い町、ここ群馬県大泉町で1991年からブラジル人に向けて日本語・ポルトガル語の学校を運営してきた大泉日伯センターでは、スポーツを通してブラジル人や地域の子どもの心身を育んでいる。

文●久島玲子(編集部)



カポエイラの動きをやってみてくれた先生のリマさん(右)、リマさんの師匠マスター・マンデラさん(中央)



上:毎年行われている「大泉警察署長杯フットサル大会」。地元警察署のチームに日伯学園のチーム、ブラジル人チームが加わり、みんなでフットサルを楽しむ/左:一緒にボールを追いかけ、汗を流し、試合の後はみんなでわたがいの健闘をたたえ合う



大泉町のいずみ緑道で行われる「活きな世界のグルメ横丁」でカポエイラを披露して、観客を魅了した



触れる機会がありません。また、最近の日本の子どもたちと同じようにテレビやゲームの時間が増え、体を動かさなくなっています。そこで、ブラジルの文化を学び、さらに体を鍛えられるカポエイラを子どもたちに教えようと教室を始めました」

先生のウイリスン・リマさんは16歳からカポエイラを始め、カポエイラ歴は44年という大ベテランで、長年日本でブラ

PROFIEL

たかのしょうこ●1945年、中国生まれ。翌年日本に引き揚げ、58年にブラジル移住。89年、帰国。91年、群馬県大泉町に日本語塾・大泉日伯センター(現・日伯学園)を開設。ポルトガル語の通訳として警察などを手伝う。2001年、NPO大泉国際教育技術普及センター設立。04年、日伯学園がブラジル人学校としてブラジル政府から認可。09年、国際交流基金の地球市民賞受賞。ブラジル人子弟の教育や地域の日本人との交流に尽力している。



高野さんも「スポーツは世界のみんなが手を取り合ってできるもの。ブラジルのスポーツだからといって、それはブラジル人だけのものではありません。カポエイラ教室は、日本人も大歓迎です」と言う。

言葉やフットサルを通して日本とブラジルをつないできた高野さん。つながるための新たな手段として選んだカポエイラが、大泉町から国を超えて広がっていく未来が見えてくるようだ。